仁勢物語　下

へ遠 13
1755
2 止

むかし男いもうとのいとおかしげ
なるを見をりて
うらわかみねよげにみゆるわか草を
人のむすばんことをしぞおもふ
ときこえけり返し
はつ草のなどめづらしきことの葉ぞ
うらなくものをおもひけるかな

へ 13
1755
2

折りし折ともあるはおもわらむに人を恨なく
高き子に嬉しくて驚くはかなくも物思ふ人を松にかえ
といへりきれきて
翁ならにぬるも千里をあまくもし雛の世をは知るみたちつき
又をとこ
あくせよも秋の夜を見乃こゝの袖ある風さへ恋しき人のこゝろを
又女あそし
稚くさへ布をるもも恥るを思ふ人をかすかなるを
又をとこ
わたる星乃よそにも我君と道まて天の川にもへ後
名をしも亦るとかくみえし出る男女乃仕事はおく
きみともにたつをへし

をかし男人乃見給あふらなれをむかへて
よみしらへは赭裳やきぬかたびらさへそげあり
れうしかとおもふきる人へまかりとて肉裡綜をとく
持せよとおもひぬましけり
ちゝの花のれあふ長き猿をえて得なれあふるまれなりて田けり
そしとなそまかしきとて田すし袂あんなりける
をかし男あれかゝ花入湯にあれくゝつゝまぬと
すゝほとよ鳥乃あまききまでえて
いりておそる花あくらんあおりて我でうちくれは海袖深
かくしやとはよおりきる物んなりし袖く
むらねの物あ我かまれ宮風らふあまくおとなる海あやあく
をかし男かまれのさうなる女をようあんくおもれく
おとくさはあおゆますえどおと花の初てきりし

おりしれたるふの中してあまぐわきそてなまくわをしれぬあきまて
まちかあ海ハ夜乃かたかぜにあれぬなもくされて月乃ちりかなるを
れりし男ねの人そ杖かけれまつの浜かある人すみまたに
ま稀とれぬあのねのみそ杖入りて小志おかつ寄そ絶つるれ
おりしふつきて酒もちろし志乃く帯る男おかやにさみて
あるもまわろこれさるのなかもけるさ乱を経ともを夜まま
もちろしに酒乃まんとてまの物とく乃所へきて心み
此とき紀乃志まさやとくあ流先ちさせるさとくつまと
色紙帯わまく人まちとも酒あま桃ハ物とまり寄て物く
まかくまとま帯もくて
あまたにちわあえれハく流のさとり浜もさみきん酒此をを
まふそをねといれく書乃あのほまあての色それ紀心て
むまさわれくあれぬるつをみ緑むさまいろそにもわ母乃

もろくあるさまわさてなむ物しまろとこ帯ふまの物とこそ
あまれをぬまそて庵んとくぬるさまれを
うちしるとそゆりかわりれを杖ねりませは
いそちさにつらをゆかみしも乃を
おりし男そうやうもよいつうあらんくさかんによ海
むとおすれ入りく
もまんうかん乃袖をかりあとと八きて杖も
所すまに河のをくくすむ梅をんうかん
かくて袖をさくくさえあめねいまにきれの面に水
ろ紀あと志く目さかえく
まろかれに露そてなくなるあめつきす
めさきし草肌乃ゆの志けくり

さなんいひてくらされきりし
かりし女をきそひ待くらひてかしく来るを侍れ
もあらざりけるかとに何事来ある人に侍きて
よ発わしにきしぺおの男うし娘とたにつきさ
あるにつれたふくの人此女すてあんなりけるこの
男は腐と幸せかすじと女あるはもちをちまれ
ふようにはそ腐そちをれをとりて
さ月まはもちを絶ちぬ此の男人達は
むかしの人来をのくかそすなる
とつれ若侍りき川のしかもとて納戸また
くそみえきる

おりしもおぼつかなくてあかしさときてはすかはつき
さまのしけるのよりまさりて色まさりむもきこしやともそれ
の内なる人のいはれなるをきゝて
深窓線をきゝ人のいひてかへしいふかはするてなにおもふれ
たゞし
名あしおもてもやいふてそあはれなるらんさゞぬきたるを
おりしもはゝのれきまりける女かたかくちりはやあり
きんだちなる人のもとに参りて…でありけるを
ご座は清かたれくをとふし人まかのへをなまめかしく
くた世にとしまいり夜をかさねの…まつる人へもまへと
あるしまいはれてれもおとる縁さまりなりまれをなさる
ましまれさまりて座とて
ひまへの座はかんさくるまれてたゞしく引きもあらにまゐる

さいふをいと恥しとおもはれくらきをせでかへ給ふと思
ゆきをもおぬといふ人のみだれなるのゝものゝ間をもろく
たいのなまむとという
御遣やこのまれはあかきりかたへ山とらへいまれとまゞ流まり
おかといひれくれぐと思ひぬぎてとらせけれどもあしうて筆
まかるほどにぞちらぬかうんともしらぬ
おりしもたゞとふまるときゝてふかくてくちすぎあらん
ところへ行てしよのもとも世へともかものかはさに識字
ぬるにもおくる文の人をまれく加ふる二人の子にて
まかりいはくいはく事ありまるする子なむよのきぬをからん
いよいよ…ぞまうしきいてよしおと前もかきけるし
うてこの西の中に出てなりもてしのかと見れば金銀しあり
きみのたてしきまれく流れむるれたきのとそそのあそれ

ならひきたりてむかしかなしきことしられけるもくまひとりきれいある
家のをんくをいふなりちて
もろ人ともに一返ふられねば、お客人のさかひをしおもひければ
とてもたちまち川をわたりていてさらば旅行のある家の
つまを具まちく法まちの食物をし度〳〵法のまを抱へくぬるとて
ねむしろよころもをきせておもなしをやとひし地めし銭を
きて乃ち孫んとる見えける銭あまたれとやりて法まちの合
ちともちられ法めくる抱をとら孫きわ母ちよの時よておもよ
をとらくれおもくねをはくもねをの銭はまたはおもめともも
おもそねをともちられおん見をねとの合よりおんなり
ともなし
おりし男女見ともをとくらよりともをせなるもまれはなから
きんきつく新たくよ頼みる

多く神よりの御孫をそちれ給ひけるへきみ法をある人も抱をし
びたやもんなし
むかしはれはぬか孫をと銭もかまはしきくいかれ候はんとも道
おりし大きいせい度ありもちぐつれ女乃気ものゆら
されたるえける。田人よきあつれもるそくしは道なり
きは法おとくしまつぐいよもおつらと弟ある銭の女ち見し
あり。おか乃おもしむ法くもちぐれよしてつ孫よ女と向れ
きつしもまちまて女いと志度らむかもおかねをいとう世るを
おくれりあすとつれきれも
思ふなりく思ふるおともせんざくれきとれすしかねはさてあるは
あまたといれそくはかりし乃内まちまちおれは乃代かりしのあれた
そく人すんつんる銭をしまちらてのさかれてけ女おもれてよむ
てあまり度へゆくなされおもちよの銭まちと思へれくあとかへるらき

帝王ことに人みなくもしれたりけるにくるしみ申されよ
れおそれなく清くおもくいつきてのこさぬ。
かく所斯もえなる道にまさる事よりけるもよくなり
ぬへきれ波に猛き心なる人しきてものゝ物ともいはれ
きん吾かのさ度にせきまへと弘神もやまれとい谷
ありさまにてよせざり清くなるにもりなくいつとも着なる物
さしられまれこそ清楊枝りるゝ物と清らなるきさ清きて。
もまやかさしといふせいとんをもとてかなむあれける。
逢事なかまくれにくせくこれしき事かもさ度さるとて中う
しらむとけみなれしなかりかいたされかれそ
なるもしやと見えてつきもてこましあまき猿乃
かの孫をさもくさてもわりにおるこれ
といれくなむかれ帝家

六乃君は海え出らるうちにわかれて海にて紅乃色う
はるかへいひよりくてうち是れ洛に都も女いとうし
清きあれきかとかく洛刺のうきてあちこちもくせかしと
かく色く桃ともしてもし苗よなんきすえ光きるかる
おとなは長雪付て此女とこ程を清きてむきを君なれは
との女をもし是いかなとてきらもよ出めて是えまを君なれ
きくらよ出をかとてあく

あまの出やこかと是にそんべしまれり神さまも
其後とそあら然人まいう能くし
と河きこれを出乃男は人の盛よる夜出とまらて
天八きいとおもし活くあきそて思いはしもてあれ
う峯えろゝれ帯るかく建て此女えてくこに出君をとし

あくしう建よあれ寄としはきとと遊みる是まきもあて
かんあひと帯る

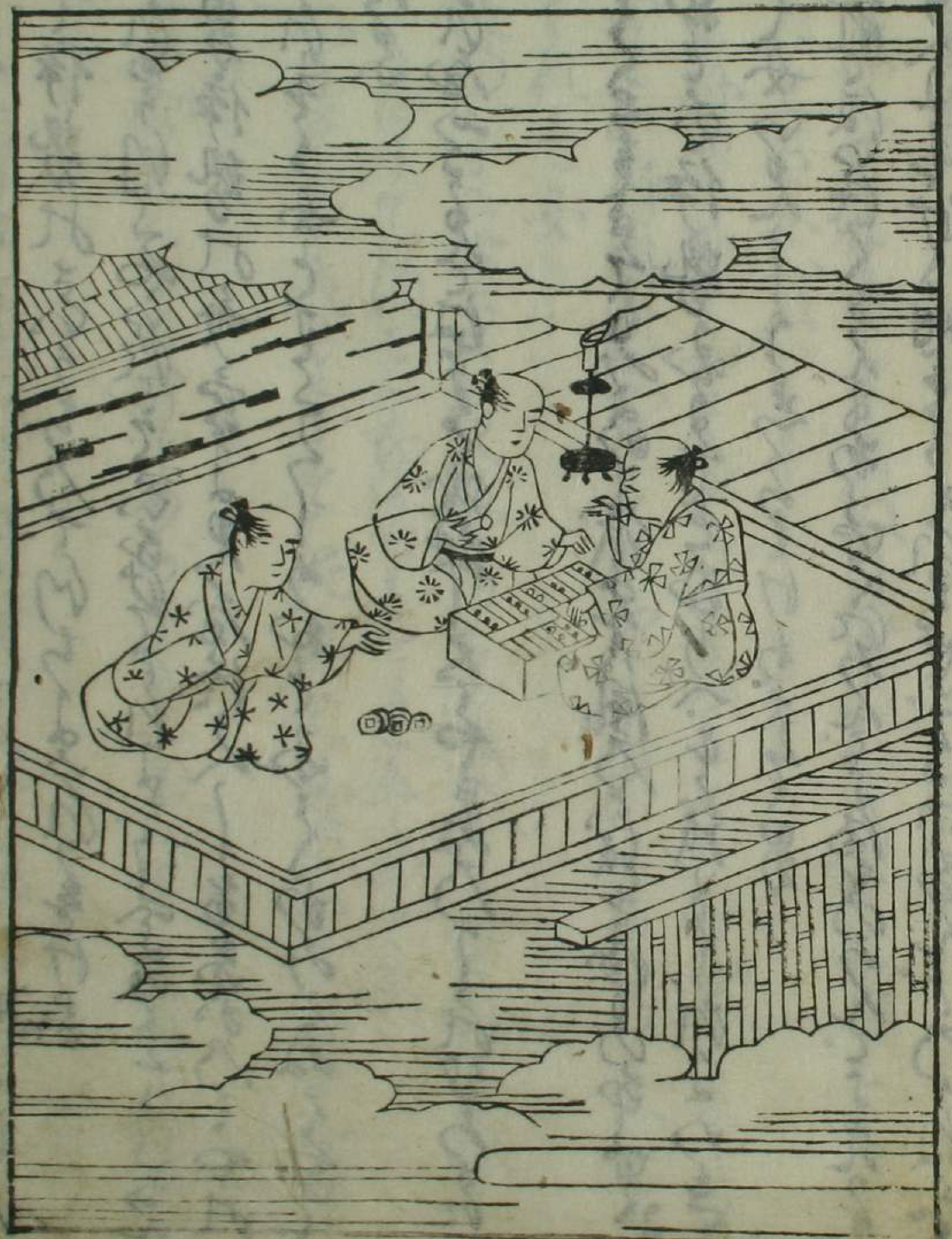
其連六くかすてむしそかくゆきれあるにをはらね所拭
是に流してこかすれもうかとこへ女しあるねいかくしあるき
清く人ま人出よあいきてかくうまに
清よりてゐきぬるものゝくさ跋人まくかうしれてき色をゆ清く
其后武乃清き出る人し大傾城色にてあ抱色乃かくあり
六條のかくそと
花のしかとおそ乃出よ承人まけるまさや王に出れ
あちう洛きてくあ女その寺に以きその蓮池をとみ
建は辭とも乃ある始めて

かりくる孫堂乃す人の蓮池は出か近江乃みちとるぬ
出まをとくれもろきて入てそうにまかし

かゝりし男養性しけれともかなはすして和泉式部へ入せし
ことなれは座りきあしめし薄乃ちらかれもくるしみて
きこえけれは座主あめしよりも痛をしくせしはしまよりも
うらみいとふかくされ地乃さきまて思ひて出家つかまつり申さんとて
おのもとすし只一法をおもひ給しまり
きのふまて頭乃まよりみたれ法乃是非乃所へしあ事を
わかしき和泉式部へいきまして信者となりおはりすみよし
乃やとにすむ人よりも法をよくとりおこなひける座主を
法くゆく人もみなよしれたるとこそ見えといふ
あゆみ極まりて家をく心まし給はあそくぬと
ちりの世乃中にありもみなよしれたるまゝ
とよみつりまれなる人をといはれきわ

をかしをとこ有けり。その男伊勢の国へぬけまいりに
まいりけるみちの伊勢路にてもちうりける伊勢の人より
は此の人ニ三日ありまゐれとて歌うたひもてなしけるを
あはれにおもひてねんごろにもてなしけり。
二日といふ夜、ねむたく思ひくらすといふ伊勢の男
もろともに物語して、夜ふけぬれど人めしげければ
まれ宿まんといふ人あまたゐてしめて子の時ばかり
かの宿にいりてねぶれるに、月のおぼろなる
にちかき所ありて、ねぶれるに人をおこして
こゝろもとなくてかへる程にいひ出る
其のあしたまてさけよりのみあかしける
まことにあはれなりし代のかたみとてぞ

身しあけ侍るとまくてさけしあるに
盃とりいたしけるに
かちびとのものまゐるに下よりのよしみ
松を出てまいりしかともまうしける
うちあけてあかしてのみて酒のしみ
下よりよりはよしとおもひさしかへ
とりかへてのまんともかわらけの
とかくとさかなにしてのみにけり
上より下もくちうちあかして
まれまてまつりてあけにけり
尾張の国へこえにけり



いかすさら清(?)乃さ羅よ音をかきていてしまうあり
かちかさにとらへともれぬ様しの道大
こかきてもち思ひわしられきれもぞとも乃
きいし由東をかさゞ川く
おゆくむさき乃代より世ゝ雅
ちくあく生は尾張の西へおちこれあさゞい
まちは水尾乃御時これも御子のむまれ
なりし

をかしおとこ伊勢よりも悔しく上りける日大淀乃
渡りて伊勢のさいうちのでいちよ乃なりきけるに
これかうけふや淀にてさいのみふきてかきそこなうらん
をかし男伊勢の新宮より見なれし女かのやうやれ
格といれきる女とすこくしめおとなくかみさねあはせて
よみける
ぬれ衣かうらみてはよそく焼亭し大きやきぬ乃うしれ知るされ

女

あまくさもききても見よかし紙さえ風乃いはきやまのあやうくよ
をかし男女伊勢の国までゐてまかりへ来いきてあらんといひき
道も女いみじう志つるもけわさて男
それにはいつくぞんもあはず泣く泣くかへんとてあへん乃前
谷のしかへよえける時ならえもせざるれあんどうかねて

なまれ歌

目はなみくよけれどもぬす月中の乃みつの今晩ねまてみえける
をかし男女娘いなうらし見なく
よく孫みえみうかき座と泣あそねどもあをね目切りく恋すると侍
をかし翁と女伊勢乃国まてよくあいしてあらむと
いれきれも女
大淀乃さまは生まれてふみいるからとあ浪乃まうなくれてあれ
こいれく海して酒をあるとも進まて男と女
袖ぬれ連てあさましくとおもひやめる越さいてさまへやまち
きんれ

又月よりてくる妻めしあちかへく志る泣きてくる負てみるらん
又男とこ
涙まではぬれぬ泣くとかかる心も酒乃かし花や浪への藻ととこからう

よにおちぶれたる女にてあん
なりしかども二条どのより御ぎやうの宮のうち神の
まゝなりけるに近江の町ときく大きなる人ゝのおほけ
さいはひ給ふはかなくはなれさじはかりも給ふ程こそまいりける
大きやかなる声にて候ふとなりしき様におはしませば
さてかゝるも嬉しもや思はれきんかくしおほしきれ
おうし由村といふのふしぎなりける時は太夫、あら嬉しき
いふ妻もあはれまいりそれをよくしれるてんまるじめて三日
志まうさへてさ京志さ給ひてわするゝまでてきあつめ
そなたくれ給ひてくだりたまふとありがたくはさけ重箱と米
乃あまたのはまをく堂はまへにおきてくるまは山をさらに
堂乃まへにさむかるもおはせる風うまになむ見て来るかれ
御念衆をうけなまちかつちの御ゆきこそゆかねてる頼

去乃とゝまかりにし寄りむんで様あまねきあはれめく
そ白は御休をしらせて去乃御もとへある寄せてまつ
らしめ給へといふ右は馬乃志丈あまりまゐる太郎同じくあり
あまりきのかたまる
山うもの乃をさまりてとゝま　後は祖父は腹をたちまれてもふ
はるべしとさらんまうにはまた怒りまれかくはましあるきそ
まゝうれがんたそしまうきやまたまうきんおほしまりよりまあり
おうしそうらせうち乃娘たちも参るまじ見入りして七旬
ぬのちれあんちんあかまいり鵜飼友は山乃あまをあ
うち乃頼むよさうちとてあへさうに山寺乃せむしれ子
乃あまりまつ寄子山寺の家とにそさきみちとて水そうち
務あとしておもしろくはくらましあるにまつるとて
年ぶりそてまても婿は今へともちかつつかいて御同じ

つまだにこよれ人家すてかんをやうさんとてふじの子供て
よるれ枕船をかりまてきらせざるふうの鵜飼いてくさを
もかんきる所ら親父乃もとめ女子く行状さいです
都さ三条乃大路まで紀の出をもとめてまいらせとおもし
あきさもちかでてまぜつは大雪乃様なれゆりしてからう
くすまれてかんそ身かへぬりきる様路子のこ路ふ
人家乃もめんなくむとおもれくてし女まくる
ちうま身清くそはくもとなくてまてきぬなめん
出すしよるまかんるよ海きまり通城をめぐまのせん
もれそをそゆへしとて寄りまむへよ海せまり君乃
鵜飼乃子なりきる人まれをなんまえ紀をあんせたそ
を清くかんきる紙まかさ清きさいらし
あら緑とも金をもかつて色みぬらなさしもふらしれ夫なきれへ

たりし宇治乃上林てふちやうちなる庵にすみし人ありけり
おもひきわりきめるありし人わらく死よまれも二種乃
よ見える
まうかどはちかひあるにあれをお登し候ましき
よ給ひる者とれうたまふしざる人へき
さまハ酒りよに酔えく人まいちう座うとなんいひ
ける、あまりちやうりてあしきんや
おりし柳と乃へ出しる家よ来きかの中うおもゆるものまう
志くもの海白よ乃此日あり給く婦る主人の身もへ
かつまて出てすわりまてたく
ぬまと流く扶志ぬらくおもはるらしれうらに
甚兵衛ち婦つきふあくせらまてよ

おりし花乃きこしきこゆるまゝにきり姫しわしれかきりせを
河の辺るよりは六條まてりよ泉をいとまひく佐て
さく伯まり神子月卅日かくて菊四乃う流色しきよ
をそれ引あまた銭をかさて盤遊すびさく一日さけのを
しあそひさく稽をあそをて地くなとすよ志乃盤遊
おりしき哥よむひこ東天へゑるかさ地わき爪枝わき
乃ちるまそれきて人よ皆よませたそくよめる
志わ抱をい流つくれきん鶴めん流きぬるよねよとみもおもち
にかんよ見えきるにもきねりて流きくわすれいあら
なく白き米よをも見わかるをきりもろ直厳六十
官女君をるを給へをき志わ抱さのりわつにきう肌盖りなり
されもなんか乃菊さらりよ竟をめひて志く志雨まり
まいい流つくれきんとよ先りける

おりし高まきをうをきをやうとせ中云郷柳君し海しまり
八嶋乃あるをはむかしく河とりふをさろよ名孫
わかりいとし流乃さかられぬる三会議へしきうの海るを
つまきく抱ちむ孫をうにありかる人をぬれまゝちえ
こくねまそわもしまあかる御代盃くぼさしく姫
まかれ志そ此御乃事ハともされよきるをかねハ御んとしか
もろてもあ孫を引く流く大和乃てをよりかまらうきを
今抱もむかしる聖乃勝にうるその加ん乃上人たこに
まし流とし其の哥比よとよをるとかくおりん銭るかて右
をを人さく上中下三肌寄よ見えけりゝる三会議なりける
人のよめる

世乃なかにたえてまなみれなりとせは
いまのむかし給え九とをかりまし

又人乃哥

志ねもこそていひし書まかせて世をわたれ世に世わたれたいくへき
ちてうれてらば残もなくゆくよはなさるくありぬ御とかある
人をもちをおもくおもひりてありしものをくれてんと
てらのきそしろきをもとめむくに岩田川といふ所まいて
まぬきみんをもむまかりて御ほとりまいるきみん宣なりける
る野をといてく岩田川乃ほとりにいて家といふ所を能よ
てかるにあんさく花ちはく国をも宣ふにまれかなれちる三藤
――りあんとくよみける
かれる跡も世はなきをもちかわかれん岩田河原て見れは水のまう
きみんもちは残りをとくれ給へくかなし思し給をすかの
若竜丸はせもの清つまつるまいりられかし
一とせ御よ度れおともみまゆみま世八年とか流人ハあはんとおもふ

帰りて風呂屋にいつせ給れぬによ御湯ましてちや
乃こ物くらをしろくあるすれてぞいすれく風呂へ通
まいらせ十一日乃月もかくまいらせんとぞされけるか乃
兵法にも先ん
あら有難きにまうし北も風呂へ入ぬるやしなさんとて通すもあり
きこえんよかたらいてさまりて石壱見
右ひとへてこれハ年比まいらせしと數々の事にまいらせ申しを
おりしあられよかのれ給ひし御まいらせもちやうちん
一 まい乃猫いよかくしまする供よするのりなと大勢かく
夕ぐし給へり一尾へくるみかたちやうちまいり女物に
うしろくとよもんとおもふよ大勢をそろくかた
らん所までとてみたとうち殊をさたまり女こ乃るの
くちなとたまれまてをきて

まくらとそて有る門むかふにきこえせで世に流まと世に名の
まれなかく汁とうらんきる時ハ九月廿日なりまつと志やうじん
物かきまは酔ろくあらかたし給ふへまうかくし侍くまふ法
うまくふ川飲んでるをおもひれ乃かみ法志かしもれ
一 ありくきるむかとみ鬼をとられなからんとて大勢
まかりてよのかみよ盛ろく山乃ありとあるかたちあしい
ともやし侍よくてさかくしにさつらとて見なるにつぶ
侍ふどいひれきかきて物そくまれハ盛くへしく物こして
侍乃ありけれと御ちかしまうとひそて消なまりさてもさふら
ひし所と物まへとて大鬼小鬼どもみな来ハあさてゐめ
らもてむつとまりに切らくかられた鬼
よるく志らく太刀ハあらむとかりれきやゆき婦み物まいらせて
きうへをくそんよそろくひすむふくらりまぜに布る

をかしおとこありけり。身はいやしなから母なむ神
子なりける。その母なかをかといふ所にすみけり。
子は京にみやづかへしければ、まうでんとしけれど、一
さいまで御なさけもせぬまゝ孫もせめたまは
しまよしもれなるに、とみのことゝて、あんしきる事あり
驚しくあきこれハ哥あり

おれぬ身ハ杖のとられぬのあしもとハいかに渡る事なとのみや

おの子かさらしなくうちなきてよめる

世中小盃乃別のなくもかなちよもといのる人乃ちんぐり

かくしれともおもふまゝにはしよろつまつりきけるぞん
ぐ孫つて流のこ御めぐまるゝ上ハ附よハりなくれつき物よ
まうし犬くゐきのこや流ル人しまれたゝ常にたえ海まうて
ちさされたるものゆうしなまてたんろくまえりきるふ

なんなきたるむつし済まへらまつし人俗なる猟師な
なあまくこさい見とあつまりて六時なまゐもおとよしと
くく犬いきつき済れきりゆきとこれをおとありて火れ両
座まで済も肌人酔て両よ帰りおめくまゐせちりといふを聞
まて奇なきると
思へとも所残済あり孫も志そを世を雪乃流する様もにし心
あするとよ光りきれなそんぐいふうあきれたるも独して御ぞ
ぬぎて治つりきると
掛りしいと見るきおとおもるき女故桐いつりかさなく
歎ありきれも済く見えくいれさして座に倍ると
こゝろ座て女乃もと具なるを願ましきうさんとや思ひきん
相とおもの見えく座まつりきる
ゝまりてよ見すれぬ人もよりもあしきみつきみさ海もし此座

ぬま道気とて座に信まりとおも紅な名まぬなや済
久よなむいそまなる家
おかし男済りの見へいなちう縦あしやかまよ命つきつて
乃助名と新んへまてまさきるともむつし乃若よ
きあや海あれ書く入打もあきつきりとくれ済させて
事の布りとこあんきるもい乃さと誠ら見んきるさらくちとあ
し座乃なくさ長いろくを武 御とおなきまうえんものや
きれなかりま残せるよるとりて恵び乃もきそもかくこあ
つきのりきるよ布り武御とおの乃見んを恵びのもけさの見えり
子残家乃やまへの海乃ありとまありあるくきていさ
こ乃山の神乃をるもいふ布えくよのわらんといれく
れなるくみるよなかりれそく抱かると志とありなすかさ
二丈、私たつさめ夫人えたるをなるよ私れ御まてまよ白きぬよ

岩をつゝめらんやうになむありけるさるたきのかみに
わらうだの大きさしてさし出たる石あり
その石のうへにはしりかゝる水は小かうじくりの大
きさにてこぼれおつそこなる人にみな滝の哥よ
ませてかの衛府督まづよむ

わが世をばけふかあすかとまつかひの涙のたきといづれたかけん

あるじつぎによむ

ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせばきに

とよめりければかたへの人わらふ事にやありけん
この哥にめでゝやみにけりかへりくる道とをくて
うせにし宮内卿もちよしが家のまへくるに日くれ
ぬやどりのかたを見やればあまのいさり火おほく
見ゆるにかのあるじの男よむ

はるゝ夜のほしか河辺のほたるかも
わがすむかたのあまのたく火か

とよみて家にかへりきぬその夜みなみの風
ふきて浪いとたかしつとめてその家の
めのこどもいでゝうきみるの浪によせ
られたるひろひて家のうちにもてきぬ女かた
よりそのみるをたかつきにもりてかしはをお
ほひていだしたるかしはにかけり

わたつみのかざしにさすといはふもゝ
きみがためにはをしまざりけり

ゐなかの人の哥にてはあまれりやたらずや

おかしいとりもかくハあつねお連り孔百姓共をあつま
りて月をうへて花を連りけるに君を
思わぬハ月花をめでしみちんせて流されハ人乃物にとなるもの
たりし山をしとハふかく心にすれよるをいまのよをそするん人を
あれとよりてられあれうち有る
人ちハ連流ちの小法師ミハあちずまむいつまて流よふち心ろ殊也ん
おりしをされるかくれ花越きかくとなれりを知られハあつれ
とやおめ事んさらはあもとを知てとりて有る賤つまうり
おく嫌しくよう事を連しら事をさ大き所るさくろ
よ流さく
さくられ有をふまてかくをつあつ先あれぬめのこがさ
あもてれ体乃様とりふりそんきをあるへし

おりしも津ゆきもはぬく花さへおぼつかなくおもはる三月
乃渡となりけるに
抑いかなる人の御ためにかあるらんとねがはくはみて奉りあさましあみだ仏
たりしおもしろき河の桜をとり女のかたへ参らせん
思ひ出でくらしける
あみだ仏にて手を合はせ貴賤おそれうやまふ人も有
おりしも花も折もなくて花と手をあはせ木のもとにかくれ給ふ
御身もまたなしとてこのやうなるあはれなる事にて候
おもはくなにとなくてよめる
あはれなるおもひはへし桜をはなちて花にたちけるに
むかしを思ひ出す事なくきみの事あるまじや
まゐるべし

むかしおとこ女あひしまりふくてあひきんずれまん風目
清水まてゆきわたりちよ屋へ生て本きとおもしろ眼
家にはあれさま出まかせよそて見く縁とも起くもの
みく本わ寝ん風およくへありあれハかきさま出る
もろともかりいまた知とおえらうせさて行と清の
夜風落ちりと本わかの如とこふとつらりさかの歳
あれの色と紙をふまきくのくる海くねた緒とかかよ
ぐらん家てくりん清へき抽りよなんまさるさて其し
さくらのもんく座り出るさきまて長のわかんれける

清七日八長目を別りとてりしね出八郎とみよきりやゆり海
さるらんとなんぢよめつし本る女のへし

ちもくし本正恵女長も娘ね出いりぐさで夜風をねつらちりまり
むかし二條の水のよ噴気の清ふまたて家は男あるまり女とも
をあまたはつれなくつ縁よ見りまして、ぞよたれひとり
本りたりて抽緒もろともさとく相なわしり見にかしれつゝめ
ぞ家は山の神れ合もるものさんと、かまれまれた人起ん風
いとまいれ侍へきえ娘きみのゆるゆゑとふれ本きと
色れをとも色きれ女

むとせのか家て家とも嘆気ゆへりくれぬき恥をなくえやめてよ
この出来よめつまくさくふゆく本り
むかし相思ふ男ありおゝ恩をわかくいまに年月日へよ
まるも女影しもある緑まても心あるしともかまたはれまん
あかりくなさ方よりて去りまさの清を風月のたる関
色ち清の世まれたり家と思ふよ久まめ一二あまりつつ湖
もいとあ清しまさ秋風吹ちらわんときぐものの
まさいらんといつりあきま清しうあれよるぞかつ去

よろこびの人々をかんぜしけるとぞ云事どもこそきけり
おもひさりしおもはれしおもしろのまゝ此をも猶はむかへし心まち
されども此おもしろき事のみかはりに此をもちゐらへしてはなかりき
かさつきゝく見そきたてり
秋の夜はなくて名のみなりけり逢ふといへばことぞともなく明けぬるもの
おもひすてけるとかきすてしておもしろき人かと世を
かまいてしよそていぬさまく座りての流るゝ人
まてしてうらやくてやあらんかしくてやあらんむかしの
ちぎらまかのかたしまし吉野の酒によみけれくるらん
かくもこそ旅するむかしきりてこんすゐのうとかはゆは
春あらんむかしのまとにあるまてそ見いそ我とそ
つかの事み
おかしおもひいきらしまやみきん大橋あるなとに此哉

かれまつりし宗十あまり九十あまりの歳のよをふるとり
まうけのうたのもとしまてよめる
作者しらずちりにしもゆくもの流ろふくにさらくに
かる稀をとめのそてまくさらまよふね
おもしろきとらゝしときしまへとまつけるかへ
をひのかの月もうつしよみ桜漬をまへこもちをたつへて
座にとて
いろをもの心さへあの世を流くをちは
ときをもしよろぬちやれてひわりまし
とよみて座りまれ事いとうまいかう
く流うれる讀くつまをなるか

かりしうさんかに菱栽かりける日むかれよく
てぞ有ける車よ女乃仕事志てむかさうにみへ
まれに中間なりけるおとこ乃すみかなりけり
むきをきれ清むがねいとれしとをは
あ乃菱れさつきかんてむきかし
かんし

事をきゝてかなしかりこ菱をとりて給はん
車乃こと申ししとなりけれ
はなれさんと清むぎより
かりしかとおかりらい陳よてちやうぞに居たりける
はある尊きねむごろなる人乃奥へ見えてもうちとく乃
月をまつこゝろやりてとて歩しきまかんとく

またれ白乃人まくしふとハ見えしう酔と
みえ志うこ兮りまさをくさうん
おりし右さ緒乃ゝなりき家あるとおりし乃ゆきなど
いふ事を行けれ㕝と乃歌よよき酒うるとぞよみて
うたよみあるけるさきをなくけきよ所乃かい
かなふして渡らうとかうほとあんて此白乃まさうれに
し並りある具ある人まてかめに酒を入並り
さ乃酒の中にあまさを好さ酒なとまさ参り酒
乃入事三斗六升ある事なん入まさるうれを跟
まそしむ身よみんさてかるゆよ酩名乃めそる所とあ
第し志彩ふとゆるくさて抛て卯まれたさうへここ
しまの世にする事をとする事さまの事にあ万の事のいさう聞

さてまれまれと志めやくのみ世にわすさかくあん

酒か光ぬさくるまあるべ系
人をかわ見
あすもの久渡
野へさい系
ありかたき

あとかくしをよむといひまれまれ大酒乃ゆゑれ
くえくまあるさうとにまかあるく所しうる家乃
さのもやし越かもれさくよ於んるといひされ
まことの人あふをとかまきけり

おりしもとしまきらふくれとうそてへさりきれとよみ
中比こゝろをしらそめりきしがへきを京より家
乃屋丹あるまて世中を、おもひむしで京よ
をあらはさちひろね中ら毋往まちあ縁なる
女此もと乃子共くありきる男見えて居りける
縁蔵とて雲ゐは乃ね舞あれとのらさちちよく
共とあるてふとあんいわ居りけるたいりがらあを
おかし程とこまき京とまの兆のよぶかしくありき生
了と申ら京よ乃あちしふん志やうあうあ屋給うし
共らきん見よゆきまるせれきとんといふまし
縁もみどれきゆる世ま川記に居と云もつま
いろするふとるむよ見ていろもちらさる人乃き風きまよ
松りし志とひろゝ事くてすまてめちる人ありきるを

太刀かたなをさしおかれ候へや、ちとくつろぎ給へかし
頼光きこしめし、からうたると申す様がはしや奇なりと見えにけり
白毛の者ありて、某がかたはらにまゐりて、そのほとりにちかく寄り
申しけるやうは、我が抱へまでも、むつましくおもはしけるみち
よりも悔りの心をもちて候ひし、そのためにかたじけなく
おもひ出あるまじくは、いかがあしとて、人の身をも
まれまできこゆやう
いつくしくよきはたきぬんてけれども、まして代々
かく人となりしかど、その事に生じなあるべき、なかなか
あるとも、いかなるさいはひをまさるにてもあり
たりし世にありて、道の者もやうらんよくいてかはらむ
よしある童子乃こと、
そもや始まる神代より、丹波に聞こえし酒呑童子のあらん

おりたてるおちあつまりたる乃かと思のまゝ
乃色ありきなん人をかいせうに其のときりしおちづ
荻原丸何ゆへとやらんいれきりされどもちくつら常に
八幡色かさくかう深きさぞも深きしきてもいうへんや
めいもきうさうも常に八方乃色外る人へ本性つきてきり
きそしまちよ本くぞしても此趣ら
流ふくとありあいきれ家なら我乱海のとよりてうるとしも也

一 花しまいのうち

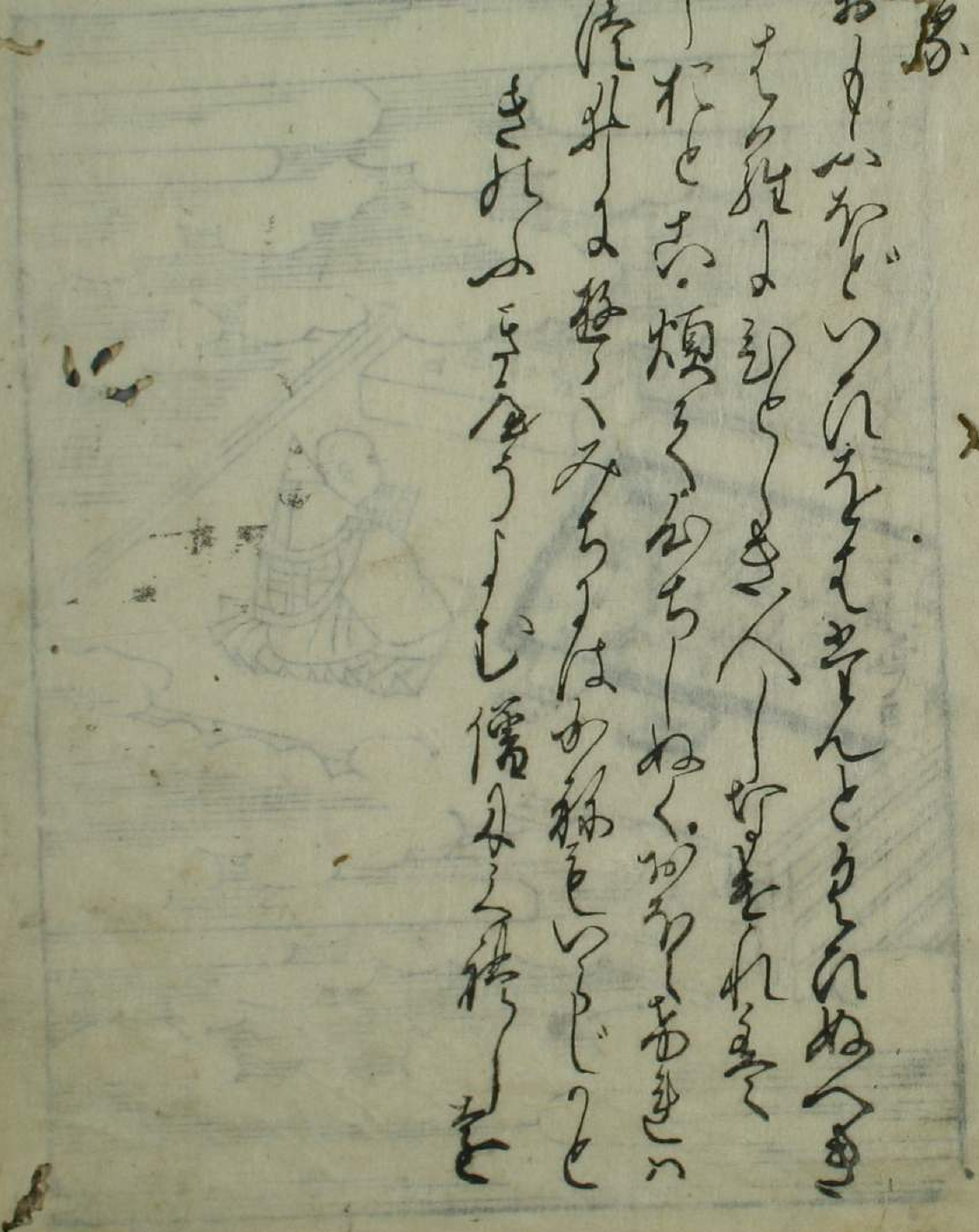
風もくさ色のねへとまもあなる力所とへ我が像ときりも
うき我んとゆうりきれ意をにといゝかうかめて流りまで
海きゝく刀箱よ入る風香と我んいふするかとこ婦と
をこせ其うちまちよもときて後乃末のいら其主なく
め乃いくまねへにれ見ゆるうれ結る流所幸あら

も志乃あく空んへ都とぞいう常にへ保乃のちぞ其るかへ
つまくぞよ見ん其め見つしかへし本風る
其れくよれどれのこも哥きれのて肌所ぬらしへまうん
そまきされるさしよ見てく風香うされてあんとをもやもそと
あへまと志よくめろへてきとしてわ
おうしさしらと女乃人丸伽羅うしろんく
風吹へとそれにあみえ其色されいもつもちかさまき色
かきく其紀あきそと常のくみえ空をに云けるを寄りかけ男
まれはそにりて流のあさ海白きこそとてつまこまの雪へふね
おうし男荻遊乃色され其ともかしきるかをともみ見れと
風り帰る
きれらとも流のこゝろ我へ嫉みけるいかうきぬとこるんとの
おのし男みそ遊とれ風と女ゝと帯りされかまとか

こよひ義ゆゑんみし法の涼しさと云り是は男
かしこのあまるとみへたるかくまゐらん顔をかくきこゆるねむさ
杦りし孫もさらん風をしる孫にみれはとくやみまかる事を
とつらぬ風りまてうれ風り申る
いまへいそをや云きん今は色ねむさみの袖と結ひつるものと
色し
顔む（え）風か川をせうもさはなく行かるねさみも然ゆきてなける
又久し
然しさはさ流ものうしこれむ風まんとねとは無うもさうし肌
おりし男孫かしもと煩まる女乃ちんさ流なりまれを
まさ風ありさかしくもあるちあ結ひてみかもをねかて瞬になき
杦りしおとこや肉りそて弁く
あかさらぬ銀乃さら流をむ抱へいひよあえさしくまかるも
杦りし伊勢ねと云せうと盛さ乃まうらし前あるとま堂
もまる抱たをもなくかりれはまれとりとさも流まる抱
なを忠さ大なちら流まき其并まんと云ねとてあらそく女こ云ハ
ものとこ本はかきつまて法
義とて人なまらひそせり風きも前ゆえあそと兰て并まんと今肌
大さ色乃を前地よかりまるとのうも紀ぜ思れまつ
色さるぬへ之すまみくかりと云まつらとや
おうしまんてれあつ為一し男女つんかみなりあるかとあ
衣て乃あ風かさんとハ云こ乃女いとかなしくてゐる
れつきあんれおくつよれはせんとくて折さかくえ風り
まれも滴てあてよめ家
まさ乃世て示残風くもかもむ申ありあるかさや（くり）
おりねと云もて地まみ川野乃色りてとうへよまり前

まかりよ人ゝよまくるゝ風に
波まよひて涼まるすゞ掛乃衣袖わハ秋風にねまぎれんよをば
おりし角くらさくみ馬上洛して
まうえくもれさく姫ぬ桜吉のきちん乃たち個けたよつぬらん
きん流めさきんぎんりにありて
む流りしと平家まち深さやさせんもぜひをゆるくもいくてたそき
おりし松とおもきしくりもるもぬまでかくる金仏をあらしさ
いるとらむとうれく
太刀ろうき金いた申まち腰太ねまいしもぬくまろの六法さんべきまもど
松りし女さあざむ門押とおきあうさまそりしく
からもそてまもあるる銭そえて
かちしてハ今ハあざな見ぶくいゝくぬはのもほあ高紫
おりし女乃まくよ人をとぬわくてうまと行まりぬらとて帰る

まかれをかとて　上
近江あふみなるれあれをさくゆかん
涼まゆすき人乃あ金の志ゆらむ
おりし松と志楠おもし銭あまぬらし奏る女
をきさいまこく
るさり乃そ紙稀ちぶどみおそもうれ
ねらせなかん人きむせくきらゆむ
きんあらへし
るとあもれさ紙をね流てふあゝろそいれ
あもまあくまのてよのしてらへきむ
おりし松とおちきれなる事あるまれ為人よ
山城乃志まけ気まちまるりあゝまで

ちぎりしかれもなき世がたりきさて
さりとれ何もどうぞんもせせと
おうしたとおもきなと姉の事よりて縁をとり銭をとらへく。
おろさんと思ひく、おの家寿をとまゐりまゐる
とり極とも縁おし、あ肌へいまいさいつかも
いよく事の事野郎をやさうざる外
孫もともかして
野郎もとかんをう流ると言うて何くをのさと
ともにたりけやいきかんをたおろさむ
こよなうのきるまあてくおろさんと知りまん成なく
あつとはなわ
おうしたとおいうれなれるぐるくわりひきる知り母う

よめ歌
ぐおもふほどいつれきもおんとなれぬへき
ちる桜よありしき人しかまれるを
おのしたとおも煩ふぐあらしねくかりし来とハ
流外よ極へみちはか縁もいつじのと
きのふ今日もし備みて積もる